

Title	大正九年度古蹟調査報告 第一冊
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.4 (1923. 11) ,p.132(596)- 133(597)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19231100-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

金海貝塚發掘調査報告

がある。要するに本書は希臘古代文化意識の發展階次を主として宗教思想上から説明したものであるが、ヴァインデルバンドも言へる如く此の時代既に宗教生活に於ても個人主義運動が充分認め得る事はピタゴラスの宗教運動などに依つても明らかである。然し希臘神話の崩解は理論的意識と倫理的意識とに依つて促進せられたのであつて、傳承的信仰や道徳に對する挑戦は最初は詩人達に依つて一部分に爲されたが、其の最後の大痛棒は哲學其の物に依つて爲されたのである。

『傳承的宗教は詩人のあらゆる努力を以つてしても到底ホメロスによつて美化され爲めに却つて力を得た自然主義や過去の文化状態などの影響を無効ならしむるを許さなかつた。』(同書 二一七頁)

實に希臘神話の世界を没落せしめたるものは哲學的概念的思惟の力であるギリシヤ社會の崩解は哲學其のものに依つて促進せられたのである。

最後に著者が序文に豫告せられし如く本書研究の續行を漸次發表せられん事を望む(一九二三、八、三〇夜)

(山 本 光 郎)

大正九年度古蹟調査報告 第一冊

(朝鮮總督府)

かつて數人の調査發掘によつて學者の注意をひきし慶尙南道金海郡金海面會峴里の貝塚が、濱田、梅原兩氏によつて更に發掘された。本書はその調査報告であつて、第一章遺跡、第二章遺物、第三章考説よりなり、なほ附表として朝鮮石器時代及金石併用期遺物發見要覽、及び附録として松本彦七郎氏の金海貝塚出土獸骨調査報告があり、多數の鮮明なる圖版、挿圖が附せられてゐる。左にその要旨を紹介しよう。

遺物の中石器數はその出土頗る稀であつて、僅かに打製石器と砥石片と各一個にすぎないが、骨角器は頗る豊富であつて、刀子柄、磨琢器、針類、大形針類、大形錐針類、骨筭、骨鏃等があり而してその製作に際しては金屬製利器を使用せる形迹がある。これは狩獵に用ゆる箭鏃が骨を主として石鏃を絶えて見ることなく恰も魏志東夷傳の倭國の俗を記して竹箭、鐵鏃、骨鏃を用ゆると云へるものと對比して、此の貝塚構成民族の文化状態を考察する上に大なる興味をひくのである。土器には陶質黝青色土器、赤色素焼、及び黒褐色素焼の三種があつて、その中黒褐色の柔き土器は最も古拙なる手法に屬し、赤色の稍々柔かなる素焼之に次ぎ、陶質黝青色のものが最も進歩せる製作なるは疑を要しないけれども、此の三者が同一層位に於て共存するのみならず、器物の形式も共通し、手法、紋様のごときも類似せる事實は、この各様の土器がひとしく同一時期において製作せられしものなるを證するものであつて、此の場合において何等時代的差違を示すものではな

い。なほ土器中に甑の存在を推察することを得るが、これによつて此の貝塚住民が穀物を蒸煮して食料に供せしこと、従つてすでに農業時代にあつたことを知り、ことに第七層より炭化せる米粒の一塊が発見せられたる興味ある事實はこれを實證するものである。またこの事實は漢代において朝鮮民族間に稻を植え、米を食せしことを確證するものであつて、日本朝鮮等における農業時代の開始時期を決定するに重要なものである。土製品には紡錘車

鐵器には鐵斧頭と鐵製刀子の柄部、裝飾品には牙製懸吊物、及び後漢時代の製作を思はるゝ玻璃製棗玉がある。ことに注意すべきは王莽時代の古錢一個の發見であつて、これは内地における諸遺跡とその文化の性質とを比較して絶東における支那文化の波及、金屬時代の諸光の何時に始まれるかを考定するに最も緊要なる資料を提供するものである。其他の諸品には第五層に發見せるものに、尖端炭化せる木棒があつて、これは恐らく發火用木燧に使用したるものであらう。

さて以上の發掘結果によれば、三十尺に上る貝層において遺物の種類は上下において何等の相違を認めず、従つてこの貝層は大體において同一文化時期に構成されたものとみるべきであり、本貝塚の示現せる文化は、一方に僅少ながら石器の使用あり、他方既に金屬器の使用を見るの時期、即ち金石併用の過渡期に屬するものであつて、その貨泉の存在により此の遺跡の一部が第一世紀もしくは第二世紀頃に構成されたものと推測するを得、また發見遺物の特長によつて、本貝塚住民が後の伊那古墳築成の民族の祖をなすものと認められる。而して南鮮石器時代金石併用期の遺跡

は、その文化と人種とにおいて内地彌生式土器系統のそれと密接親縁の關係にあるを推測せしめ、従つて金海貝塚の發掘と調査とは單に朝鮮における先史時代の研究に重要な寄與をなすのみならず、日本内地のそれを究むるに資すること頗る大であつて、吾々は本調査の關係者に深甚の敬意を表するのである。

(松本芳夫)

石川縣史蹟名勝調査報告 第壹輯 (石川縣)

本書は加賀、能登の古代遺跡の調査であつて、石器發見の遺跡と古墳との二編よりなり、前者は刈安及上野遺跡、笹塚及末松遺跡、萬行及大津遺跡、大根布及附近の遺跡、石器時代概觀の五章後者は法皇山の横穴、月津及分校附近の古墳、御幸塚及附近の横穴、散田(金谷)及附近の古墳、邑知及志賀郷の古墳、鍋山古墳、徳田村附近の古墳、須曾の古墳、諸橋及鶴巢村附近の古墳、岩坂附近の横穴の十二章、附録古代製陶所遺趾に分たれ、鮮明なる圖板と實測圖とを多數附してゐる。

加賀、能登は古來高志の一部であるが、比較的早く大和朝廷の文化に侵入し得る地方であり、對岸は文化の早く開けたる鮮滿地方であるから、海岸方面から來る特殊文化の侵入を豫想し得べくこの關係は直ちに裏日本における古代民族の消長を考察する資料である。

本書は、發見と研究とによつて多くの問題をわが古代史に提起